



精一杯。 土づくりから根付く人づくり

畑違いから心機一転。有機農法、微生物酵素農法とこだわりの強い師の元で研修を経て、友人と二人で起業。土づくりからはじめ、研修生を受け入れて人づくり、そして地域貢献にまで勤しむソルモンド代表・富田永誠さんにお話を伺いました。

——ソルモンドについて教えてください。

同じ研修先だった杉本さんと個人事業主同士二人でソルモンドっていうグループを立ち上げたんです。土づくりを大切に考えながら、主に白ネギを生産しています。今では研修生やパートナーもいて、パートナーに来てくれた方の娘さんとか、京都先端科学大学の卒業生もインターン後にうちに来てくれたりしています。

——農業を始めてどのくらいになりますか？

就農して七年目になります。妻が亀岡出身で、結婚と同時にこっちに来て就農しました。相手の杉本くんは農科大学を出て農家さんを手伝ったりっていう経験があったんですけど、僕自身は全く畑違いで。

——なぜ農業を選ばれたのですか？

元々自営業がずっとしたかったんです。自分で生産して売れるものって考えると農業かなと。衣食住の中の食っていうのは絶対なることがないと感じて。もう一つの理由として、僕が研修入る十何年前からも

農業生産者の高齢化がわかっていました。これから衰退していくのが見えている中で、無くなってしまうといけないものだと感じたので、自分ができるのだったら、と農家を目指しました。

その地で持続可能な農業を目指す

——生まれた場所では農業が身近にあったのですか？

全くないです。ナスひとつどうやってできているのかも知らない状況で研修に入らせてもらいました。最初に入った研修先で三年間お世話になって、そのあと紹介で「愛善みずほ会」(※)に行っただけです。今その農法を実践しています。微生物酵素農法という土づくりを大切に考えた農法で、いいものを融合させながらその地で持続可能な農業を目指す。土をよくして、初めて野菜が良くなるっていう理念でやっているんです。農家の人によっては土づくりもせずに、その畑に栄養がなくなったり、悪くなったからと次から次へ転々としていく人もいます。

※持続可能な農業技術の研究普及、安全・安心な農作物の生産及び食・農・環境の改善をめざす団体。昭和二十三(一九四八)年、宗教法人「愛善苑」(のちの「大本」)によって創設。

——大半が白ネギの生産と聞きましたが、至った経緯はなんですか？

ソルモンドを立ち上げた時から白ネギづくりに取り組んでいるのですが、まず、去年の年末に野菜の値段がガツと下がったのってご存知ですかね。白菜とか大根とか。農家さんは畑で捨てているような状況。その中でも白ネギに関しては価格も需要も安定して、その影響が少ないんです。その代わり作るのが大変。白ネギはもとも関東圏が産地なんです。それはなぜかというと、白い部分を増やすためには土寄せというのをし

地域みんなで人を育てる

——研修生を受け入れているのはなぜですか？

僕が研修していた時に、亀岡でたくさん同期がいたんです。ただ実際、今その人がやっているかと言ったらとても少ない。受け入れ先が悪いとかではなく、研修生がいかに就農に対して最短距離で無駄なく行けるかが問題なのでは？と考えました。そして、僕が研修中に教えてもらえなかったことや、踏み込





んでそこまでできなかったこととか、そういうところまで、農家としてやれることをやってあげたいなと思うようになりました。うちに来ている研修生に関しては、伝票すら全部オープンにしています。普段見せないような内部のこと、お金のことも。一番大事でしょ。就農する上で。研修先で教えていただいたことを教えるのは当然なんですけど、それよりももっと踏み込んだところまで教え

——農業を通じて発信していきたいことはどんなところですか。

どうなんやろね。正直、今はそんなことを考える余裕もないです。自分の経営と、今近くにいる研修生と、地元のこと考えるだけで精一杯。まあ自分の農業を成功させて、最低限でも今いる研修生を育てる。もう一個は地元でもっと雇用をつくるということができたなら、自分の中での地元に対しての恩返しにはなるのかな、と思っています。



てあげないと農業って厳しいんじゃないかと。なかなかそういう受け入れ先ってないんです。それがやめて行く率に反映してるのかなと。それをなくすることが一つ目的ですね。手を止めてでも教えないとダメですし、自分としてはしんどいんですけどね、やっぱり。その代わりにこの辺で一緒に就農してもらって、地域活性化ができる。農地も増えてきますしね。農家として地域に入り込むっていうことは住むのと同じくらいのことなんです。地元に入って初めてそのルールとか、そういうこともわかるんで、研修生とはよく一緒に地域活動に参加しています。行政も含め、地域みんなで研修生を育てるっていう意識も必要だと思います。

——野菜を育てながら人も育てるのは大変ですね。

僕らの強みとしては二人でやっているってことなんです。



- 1 白ネギが土に埋まる深さについて教えてくれる富永さん
- 2 畝の高さをどんどん上げていく
- 3 地域の方や、研修生を受け入れながら共同作業を行なっている
- 4 一本一本生育状態を確かめる
- 5 事務所前で微笑む富永さん

日本クルベジ協会

井上保治さん

文・写真／佐藤壮一郎
アシスタント／大垣留衣



野菜を育ててクールな地球に

農家としての栽培活動以外に、炭素を地中に埋めて野菜を作る日本クルベジ協会に所属して環境問題にも積極的に取り組まれている井上さん。現場の視点と俯瞰した視点を併せ持つ井上さんの考える、新しい農業の可能性について伺いました。

野菜の栽培が地球温暖化を止める？

——大気中の二酸化炭素を減らすことができるクルベジについて詳しく伺ってもよろしいですか。

現在、大気中の二酸化炭素の増加が地球温暖化に繋がり、気候変動に大きな影響を与えていると言われています。そこで炭を地中に埋めることで大気中の二酸化炭素を減らすことができます。その畑で育てられた野菜がクルベジです。さまざまな産業において二酸化炭素が排出し続けられる状態に対して、排出を減らす取り組みをして差し引きゼロ（カーボンニュートラル）にし、SDGsにも貢献したいと考えています。二酸化炭素の取り引きをする仕組み（Jクレジット）の一つにもクルベジは選ばれました。

——このクルベジの取り組みの中でどういったことが難しかったですか。

何より協会を正式な認証機関として確立するのが大変でした。というのも埋める炭がちゃんと土の中で崩れないことが大事なんです。細かくなりすぎて一年後に空気中に出てきてしまったら意味がないからです。そのため国連では、百年以上ちゃんとその場に残っていることと定義されています。そこで国連品質に沿ったものを扱うにあたって、日本クルベジ協会が窓口となることができました。

その地に合わせて、全国へ

——この栽培はこの土地でもできるもののですか。



農をひらく

農業人口は減る一方。

耕作放棄地も多くなり、地域のコミュニティーの形も変化しつつある。農業といえば辛いし、儲からない。そんな考えがまだ世間にはあるように思う。閉じられていく農業をひらき、新たな農との付き合い方を考え、人や地域との付き合い方をつくる、たくましい農家がいる亀岡は明るい。

- 京都エンジョイファーム（農業・飲食・研修生育成） 16
- 特定非営利活動法人 障害・高齢者就労支援センター
LINK'S（有機栽培・就労支援） 19
- 菱田農園（有機栽培・直売所・就農支援） 22

これはどこでもできますが、亀岡と同じやり方では上手くできなくて、その土地に合わせた取り組みが必要だと思っています。環境によって育つ作物は全く違いますよね。例えば関西と関東では土質が違って農機具も全然違うんです。だから、関西のものをそのまま関東に紹介しても上手くできません。教科書のように全国的に伝えることは簡単にできますが、品質を良くしようとしてその地にマッチさせようとすると、何か変化させないといけないですよ。その土地に住んでいる人が、その土地に合わせた変化をさせることで亀岡以外にもクルベジが活躍できると思います。

—— 亀岡限定にした方が野菜ブランドとしては
有利な気もしますが……。

確かにその土地でしかないというと、地域のブランドになって有利なように見えます。しかし、活動の輪が広がらないと認知もされにくくなってしまいます。僕たちは、亀岡限定のブランドにすることよりも全国的に取り組みを広げることが、環境に及ぼす良い影響は大きくなると考えています。

農業の新しい可能性

—— 井上さんはなぜクルベジに目をつけたのですか？

全国的に高齢化が進んで、農業をする方が減ってきているとよく聞きますよね。農業に興味のある人は増えてきて、趣味でやっていると楽しい



けど、やっぱり商売としてやると厳しい面も多いんですよ。そうなった中で、今の農業を変えるには仕組みから考えないといけないと感じたんです。そこで、日本クルベジ協会は現在企業CSR活動の連携も行っています。CSR活動とは企業の一つの責任として社会的な課題の解決に取り組むことです。協力して下さる企業はクルベジを通して、環境保全運動の一端を担うことができます。クルベジの消費者に直接企業の取り組みを宣伝できることが強い広告となります。農業を通して、栽培だけでなく地球の環境問題にも貢献することができ、さらに社会的に広く巻き込んでいける可能性を感じたんです。

—— ずばりこれからの展望をお聞かせ頂けますでしょうか。

以前は炭入りの堆肥を作って活動していたのですが、まだまだ市民活動の規模の取り組みだったんですよ。社会的に意義があるけど事業として回りにくい形でした。しかし、政府の認証のもとで行えるようになり、モデルケースとしても確立されてきたため、全国的に展開しようとする時期に入ってきています。農家として、社会を巻き込んで地球に優しい活動の中で、おいしい野菜を作っていきたいです。



1 河原林町や馬路町で農家をされている井上保治さん

2 間伐材を炭にしたところ

3 二酸化炭素を地中に留めるには一定の大きさの炭が必要

4 炭を入れた畑の前で